

解説：古代の仏像の樹種はカヤである？のか？？

Mitsuo Suzuki : Are Japanese wooden statues of the Ancient Period made of *Torreya nucifera* (L.) Sieb. et Zucc ?

昨年、驚愕すべき樹種同定結果が公表された（金子ほか、1998）。それは国宝や重要文化財となっている唐招提寺や大安寺の仏像がほとんどカヤ材であるというものである。唐招提寺の伝大自在王菩薩立像、如来立像、十一面観音立像など6像からの試料9点、大安寺の十一面観音立像、広日天立像、持国天立像、聖観音立像、不空絹索観音立像など9像から19点、神護寺の薬師如来立像から1点、元興寺の薬師如来立像から1点、合計17像から30点の試料についてその樹種を調べたものである。その結果、大安寺の多聞天立像の岩座上から得た試料2点のうち、1点にはカヤとヒノキの破片が混ざっており、もう1点は、やはりカヤ？とヒノキが混ざっているようだが試料の保存が悪く判然としなかったが、それ以外の28点は全てがカヤであるという結果である。同定を担当した農水省森林総合研究所の能城修一および藤井智之はすべての試料について剃刀を用いて切片として光学顕微鏡で観察し、いくつかのものは直接走査電顕で観察して同定した。その結果、上記のヒノキとしたもの以外にはカヤに特徴的な2~3本ずつまとまった顕著ならせん肥厚が認められたという。

古代の仏像の樹種については小原（1963, 1972）が国内の著名なものをほとんど網羅して報告している。小原は全国の寺院を訪ね歩き、仏像から楊子の頭ほどの破片を集め、それが出来ない場合はスンプ法でほんのわずかの繊維をはがし取り、それを顕微鏡で観察して同定したという。同定法は今回の能城らの報告では走査電顕も用いているが、基本的には同じ手法によるといえる。調べられた仏像は659体で、これには鎌倉時代以前のものはほとんど漏れなく含まれているという。すなわち、能城らの報告した17像のうち、唐招提寺の十一面観音立像、伝衆宝王菩薩立像、大安寺の十一面観音立像、聖観音立像を除く13像についてその樹種が小原によりすでに報告されている。そして驚愕すべきことは、その小原の報告と今回の能城らの結果が全く異なることである。小原の報告では唐招提寺の如来立像がカヤであるほかは、12像すべてがヒノキであるという。能城らの報告ではすでに述べたように大安寺の多聞天立像でカヤとヒノキが混ざった試料が得られたほかはすべてカヤである。このようなあまりにも違う結果は一体何を意味するのだろうか。

国宝や重要文化財の仏像の樹種を調べるというのは大変難しい。通常の遺跡出土材と同様に剃刀刃で切片を作

成してと言うわけには行かないからである。本体に直接剃刀を当てるなどと言うことはとうてい出来ないから、多くの場合、胎内にある仏像を彫ったときの木の残材だと言われている木片や破片、割れ目の中のわずかな破片、はがれ落ちたような繊維、などを丁寧に集めて調べることになる。問題は果たしてそれらの破片や繊維が仏像それ自身に由来するものである保証があるかと言うことがある。第二には古代の仏像は多くが一木作りであるが、それでも台座や光背は別な木を削って作ったものであるのが普通である。ある像から試料を取ったと言ってもそのどこの部分であるかが問題となりうる。その点、能城らは同じ像でも台座の蓮肉と本体の背面の割れ目などと言うように複数の異なる部分から試料を得るようにして、確実性を高めている。第三には後世の修復である。修復した部分はもちろん別な木で作られているから、樹種も違う可能性がある。このような条件をきちんとクリアして、始めて古代の仏像の用材の実体が明らかになる。

これらの条件は小原の時の方がまだ緩かったといえるが、では、小原と能城らの結果がこれほど違うのは一体なぜなのだろうか。小原がヒノキとカヤを顕微鏡的に区別する能力に欠けていたとはちょっと思えない。カヤとヒノキの区別は、あて材など変な部分でない限り、少し解剖学のレクチャーを受ければ容易に出来る。彼の本（1972）には諸処に仏像とそれの木材（だとする切片）の顕微鏡写真が掲載されている。ヒノキとされる写真は3例載っていて、写真が小さくて判然としているわけではないが、それを見る限り誤同定を行ったようには見えない。しかし、正直言うと我々の遺跡出土材の報告書でも顕微鏡写真を載せるのは代表的な標本だけである。つまり明確にその樹種であることが誰の目にも明らかかなような標本を示し、顕微鏡写真を見せても分からないようなのは載せないのが普通である。はっきりと誰の目にもヒノキであることが明らかなもの以外はカヤなのかも知れないのだろうか？あるいは得られた試料が仏像本体とは別な部分に由来するものであったり、後世の修復した部分に由来するものであったりしたのだろうか？これは現在のところ、その理由を知ることは全く出来ない。事実として残るのは、改めて調べなおしたら、ヒノキはほとんどなく、カヤの仏像ばかりである、という結果だけである。この結果の意味するところもまた非常に大きい。もし、古代の仏像の大部分がカヤである、ということ

あるなら、これは古代における木材の用材観を根底から変えることを余儀なくする。私自身、関東地方や石川県、宮城県などの中世頃の仏像をこれまで何体か拝見したことがあるが、そのいずれもがカヤであった。これを私は都（畿内地方）ではヒノキを使うが、地方ではカヤを使うのかと考えていた。能城らの結果が常識の変更を意味するのなら、その考えも成り立たなくなる。

小原の同定結果にはその証拠となるものはどこにも示されていないのが大部分である。そして同定に用いたプレパラートなどが保存されているかどうかは不明である。木材に限らず植物や動物を同定する場合、誤同定をする可能性は常に存在する。また、その時点で利用可能であった情報では同定しきれなかったものもある。その様な可能性に対する保証として同定に用いた標本を証拠標本として保存することは必須のことであることを筆者はこれまで強く主張してきた(鈴木, 1996)。今回のこの結果は、過去の同定結果がそれを保証する証拠にアクセスすることが出来ないものはきわめて資料価値が低いものであることを改めて示したといえる。それにしても、小原が調べた 600 もの仏像、出来るなら再度きちんと調

べて確かな証拠を保存するとともに、古代の木彫仏の正しい用材観を是非とも得たいものである。

それにしても「京都神護寺の薬師如来像は、ヒノキの一木造りで、貞観期の一番古い作品の一つである」(小原, 1972, p. 72) と言う文章を一体どう読んだらいいのだろう。途方に暮れるばかりである。

引用文献

- 金子啓明・岩佐光晴・能城修一・藤井智之. 1998. 日本古代における木彫像の樹種と用材観. MUSEUM (東京国立博物館研究誌), 555 : 3-53.
- 小原二郎. 1963. 日本彫刻用材調査資料. 美術研究, 229: 74-83.
- 小原二郎. 1972. 木の文化. P. 217. SD 選書 67. 鹿島出版会.
- 鈴木三男. 1996. 遺跡出土木材の樹種同定結果をどう整理・保管し、データベースとしていくか. 植生史研究, 4 : 65-69.

(鈴木三男)

書評(新刊紹介): 小林達雄編著. 1999. 最新縄文学の世界. 256pp. 朝日新聞社, 東京. 本体 1700 円.

近年の縄文時代の遺跡の発掘調査から分かってきた新しい事実はあまりにも多い。これからも分かってくる事実はあまりにも多いと予測される。山内清男以降の縄文時代・文化のとらえ方の現時点での総括を、平易に概説しようとしたのが本書である。そしてまた、縄文時代研究の代表的研究者である編著者小林達雄とその一門(厳密には私のように無関係な者も随分いるが)の縄文学の集成を紹介しようとの目論見もあるように見える。

本書は、第1章縄文文化研究の動向と展望、第2章縄文スペクトラム—どこまでわかったか、第3章縄文キーワード—縄文文化を読み解く手引き、からなる。第1章は小林達雄である。本書の題目、最新縄文学の意図がそこからは読み取れない。本書は本当に小林達雄編著なのか、それとも題目だけを目立たせようとしたのか。要するにこれは研究小史に過ぎない。第2章は16のトピックスから成り立っている。私も1項目—生態系を攪乱させて有用植物を選択した知恵、を書いている。

第3章は、縄文時代・文化に関係する用語解説である。海藻・海草が取り上げられたのは興味深い。海進・海退

はあるが、縄文海進がない。縄文海進がしっかり解説されていないのは、大きな片手落ちである。環境考古学を、考古学の一分野というより遺跡を媒介とした人類史と自然史の複合領域だといえる、とするのは一歩も二歩も前進か。植物考古学を、縄文時代の植物質製品や植物遺体を対象とする研究領域、植物考古学の登場で道具や施設の実態に迫る研究の道が開かれ、縄文時代研究は痕跡学から実態学へと転換する契機を得たとし、追跡調査には伝統的な考古学の枠組みを超えた新装備や専門スタッフも必要になり、考古学の組織改編を促しつつある、とする。年代測定法はあまりにも簡単で実態がこれでは分からない。放射性炭素法は独立に取り上げなければならないほどである。全体として質・量のバランスがよくないのは、短期編集のせいであろうか。

とは言え、本書は平易な語り口で普及を図るのが目的である。縄文時代・文化を知らずして環境のみを語るなど、もう遠いむかしのこと。考古学のある実態を知るにも本書は良い。

(辻 誠一郎)